

夏目漱石とクラシック音楽

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

(第19回)

ユンケルの生家探しの旅

武漢に始まった新型コロナウイルス感染症が、ヨーロッパで大流行して、各国政府が対策に追われていた2020年3月8日、ミュンヘンを拠点に活躍するピアニストの川崎翔子さんから、久しぶりにメールが届いた。ドイツのバイエルン州政府は、明日（3月9日）から5週間、すべての幼稚園・学校・大学の休校を決定したというのである。ミュンヘンでは患者数もここ2週間で膨れ上がって、恐怖が走っているという。

2020年の春は、世界中が重苦しい空気に包まれて始まった。ネット情報によると、ドイツで最も深刻な州は、ノルトライン＝ヴェストファーレン州であるという。ここは私が昨年12月、我が国の近代音楽の恩人ユンケルに関する資料集めのために滞在したところである。彼の故郷シュトルベルクも、彼が学んだケルン音楽院も、東京音楽学校の契約満期後に帰国して教鞭をとったアーヘンも、この州に属している。ANAが着いたデュッセルドルフは州都である。あの12月、ノルトライン＝ヴェストファーレン州は聖なる明るさに満ちていた。私はケルン大聖堂で、クリスマスイブの深夜ミサにも与ることができた。堂内は乳香の香りに包まれ、荘厳にして華麗であった。

ユンケルの生家も訪ねた。それにはアーヘンを經由する必要がある。アーヘンというと、この地の大聖堂は、ユネスコの世界遺産第一号である。

アーヘンとシュトルベルクの間には単線の電車が走っている。しかし、本数はとても少ない。シュトルベルクへ行くには、丘をいくつも越えなければならぬ。バスは4路線あった。中央ターミナルは大きくて、とても複雑だった。1時間弱のバスの旅の初日は、終点で降りてはみたが、結局、道に迷って日が暮れた。生家探しは頓挫した。数日おいて、バスの路線網を綿密に調べて、再度挑戦。今度はシュトルベルク市役所前を通る路線を選んだ。これが正解であった。市役所のインフォメーションの女性職員は、公務員特有のぶっきらぼうな話し方だったが、地図に印をつけて渡してくれた。ユンケルの生家は白亜の3階建てで、黒い屋根には小さな煙突が付いていた。ご遺族が大切にされている昔の写真通りの建物であった。ユンケルは1868年生まれ。この家で7才からヴァイオリンを始めた。シュトルベルクは二度の大戦の戦禍をまぬがれていたのである。

一方、夏目漱石が1867年に生まれた東京早稲田の家は、すでになく。現在、そこには洒落たマンションが建っている。オーナーの加藤利雄氏は漱石に敬意を表して、この文豪の生誕百年記念に、敷地の一画を新宿区へ提供された。だから、マンションの一画には、「漱石誕生之地」（弟子の安倍能成筆）と刻まれた石碑が建っている。ここは漱石ファンにとっては、大事な聖地である。